

親和会会報

白坊隆書

18号
2007.5



第155回親和会を終えて

第155回親和会運営幹事代表
化学システム工学専攻教授
土橋 律 (昭和56年卒)

第155回親和会総会・懇親会は平成18年11月11日(土)に新宿の京王プラザホテルにて開催されました。小雨の降るあいにくの天候でしたが、84名のご参加をいただき、盛会のうちに進行することができました。

定刻の16時過ぎに総会が始まり、理事退任の件、理事選任の件について承認がなされ、平成17年度会計報告、事務局活動報告が溝部事務局長よりありました。

総会に引き続き開催された懇親会では、今回の担当幹事からの挨拶に続いて、三浦勇一会長からご挨拶があり、次期会長の加治久継様、次期副会長の北澤宏一様からご挨拶をいただきました。刀祢館正之様のご発声による乾杯をかきりに和やかな宴が始まりました。恒例により、参加者が知り

合いどうし固まらないように受付時にテーブル指定をさせていただきます。初対



面の先輩、後輩の新たな交流が広がりました。

懇親会中盤には、大学院親和会スポーツ大会表彰式がおこなわれ、続いてアトラクションの時間となりました。今回のアトラクションは、『時代の流れに合わせ進化する5号館』と題して工学部5号館の最近の様子をスクリーンに上映しました。「5号館は最近どうなっているの?」という疑問に答えようと、最近の5号館のハード面(設備など)・ソフト面(学生気質など)をPCで紹介させていただきました。特に平成3年卒の幹事の努力で、現役学生からのビデオメッセージも交えた内容の濃いものとなりました。ご覧になった先輩から、「最近の学生もが

んばっているね」と言っていたのだいた時は、幹事一同大変うれしかったです。

しばしの歓談の後、次期幹事からの挨拶があり、御園生誠副会長から閉会の挨拶をいただき、会はお開きとなりました。私自身、親和会には欠席がちだったのですが、幹事に指名されたこともあり、前回・今回と2回続けて出席致しました。大先輩から同期、後輩まで多くの方々と大変気軽に交流でき、思わぬ人のつながり、研究・仕事のつながりがひらけまし

第156回親和会のお知らせ!

日時:平成19年10月20日(土)
16:00~18:00
場所:京王プラザホテル(新宿)
47階 あおぞら
企画:『我が研究室自慢』
スポーツ大会入賞研究室の学生に、今度は研究室紹介で競ってもらいます。お楽しみに!
運営幹事:昭和57年卒・平成4年卒



幹事の皆さん!ありがとうございました。
次期幹事の皆さん、期待していますよ!



た。このように気軽ですが大変有意義な会ですので、まずは皆様ご参加頂くことを強くお勧めします。終わりとなりましたが、ご出席頂いた方々、準備にご努力頂いた事務局の方々に感謝の意を表しまして会の報告とさせていただきます。ありがとうございます。



親和会会長を退任するにあたって

三浦 勇一（昭和37年卒）

株式会社トクヤマ相談役



親和会の会長を二期四年務めさせていただきましたが、あまりお役に立てなかつたことを申し訳なく思っております。この間ご支援、ご協力賜りました御園生副会長をはじめ理事、会員の皆様から御礼申し上げます。

事務局長の溝部教授、それに前事務局長の西郷教授と事務局の近藤さんの献身的な努力によって親和会のすべての活動が支えられています。また多忙な時間を割いて、一年間にわたって準備をして下さる幹事の皆様の工夫を凝らした企画、学生の参加などが功を奏して、参加者が一時100名を切る状況にあった総会・懇親会が盛況裡に開催されるようになりました。また総会には出席できない遠方にお住まいの多くの会員の皆様が年会費を納入してくださることによって親和会の継続的な活動が可能になっております。改めて皆様に心から感謝申し上げます。事務局の大変なご努力で親和会名簿は改訂の度に充実したものになっています。最近送られてきた最新版を開いてみて、その最初の頁に明治12年、工部大学の第一期卒業生の中に高峰讓吉博士の名があるのを発見して感動するとともに、このような長い歴史をもった親和会を大事

にしていきたいと改めて強く感じました。親和会の会員である小宮山先生が総長である間に東京大学は創立130周年を迎えることとなります。このような長い歴史と伝統を踏まえながら、しかし法人化後の大学はいま大きく変わろうとしております。大学がどう変わっていくのか、日本の高等教育がどう変わっていくのかによって日本の将来が決まるといっても過言ではありません。法人化後、年々1%ずつ削減されている国立大学運営交付金の配分に、さらに成果主義を導入しようという動きがあります。私たちはいま大学について、もっと関心をもつ必要があるのではないのでしょうか。そのためにも総会、懇親会により多くの現役の教授に出席していただき、民間の人との交流を深めていただきたいし、それがまた一方で親和会の

退任にあたって

御園生 誠（昭和36年卒）

（独）製品評価技術基盤機構理事



副会長として、三浦会長を4年間補佐しこの度退任した。この間、御世話になった役員諸氏また事務局の西郷、溝部両教授と近藤さんに謝意を表すると

親和会 現在から未来へ

意義を高め、出席者の増加、親和会活動の活性化につながることを考えます。加治新会長、北澤新副会長のリーダーシップの下に、親和会の活動が益々充実したものであることを期待しております。

共に、新会長、新副会長のもと、親和会がさらに発展されるよう祈念する。

さて、ここで、わが国の「応用化学」の歴史をひもといてみるのは、化学技術の未来を考える上で意味があるかもしれない。工学における化学は、応用化学の他、工業化学、製造化学、実地化学、化学工学などと呼ばれることもあったが、

名称の議論は非生産的消耗戦になりかねないのでここではしない。

近代の科学と工学（技術）が同時に輸入されたことと産業重視の国策から、欧米とは

画然と異なる工学重視の大学教育が日本の特徴であった（東アジアにはほぼ共通）。

このことを象徴するように、東京大学工学部の源流には二つあって、単純化していうと、一つは開成学校から東京大学理学部に至る流れで、もう一つは、工部省

工学寮から工部大学校を経由するものである。1886年（明治19年）、理学部化学科応用化学コースと工部大学校（応用）

化学科が合流して、新設の帝国大学工科大学の中に応用化学科2講座と火薬学科1講座ができた。当時、理学部には応用

化学以外にも工学系学科があり、それらも工科大学に移行した。（註：明治初期は

制度や名前が頻繁に変わった）

その後、工科大学（1918年から工

学部）の卒業生たちは、日本の化学工業の中核を担いつづけることとなる。帝大以前の工部大学校明治12年卒の高峰讓吉のように米国実業界で成功したもののや同期の森省吾（工業化学会初代副会長、会長は榎本武揚）、2年後の河喜多能達がいる。また、日本化学会初代会長久原窮弦や高松豊吉、中沢岩太は理学部工学科卒として親和会名簿に載っている。帝大

になってからも、明治中期から大正初めの卒業生に、鴨居武、田中芳雄、喜多源逸、石川一郎、厚木勝基、莊原和作、亀山直人など錚々たるリーダーたちの名がある。第2次大戦後、工学部大再編があった、応用化学科（4専修構成）が再発足、

さらに、1960年代の高度成長とともに拡大して4学科体制（工業化学、合成化学、燃料工学（後に反応化学）、化学工学）があった。1992年に始まる大学院重点化、そして独立法人化、さらに、

工学に対する時代の要請の大きな変化の中で、化学・生命科学3学科3専攻体制ができた。応用化学系のみならず、工学系全体が、戦後だけでも3回目の大変革の時代を迎えている。今後、さらなる変容を遂げることは間違いない。

学部学生であった頃、学生全員を豪華な親和会（同窓会）に招待してくれた先輩たちの厚意を今でも思い出す。懐古的

になってばかりもいられないが、先人たちの積み重ねた歴史を想いつつ、未来に向けて、真に社会に貢献できる「工学としての化学」のあり方を考えることは、それを専門とするプロ集団である親和会

にとつて意義深いのではないだろうか。

温故知新

身边雑記

早野茂夫（昭和61年退官）



昭和23年3月、第二工学部を卒業して企業に数年勤務した後、31年に生産技術研究所、浅原昭三教授研究室の助手に任用していたが、その後、38年間、東大にお世話になった。

生産研、環境安全センター等で、「大学紛争」の激動を体験し、普段はともお話しできるようなことのない方々と接触・交流できた。とりわけ、鎌田仁先生が献身的に推進された環境安全センターの運営では、貴重な体験をさせていただいた。東大退職後、二つの大学に勤務したが、平成9年に教職を辞し、現在に至っている。

以前から、余裕ができればカメラを持って好きなものを写して歩こうと思っていたので、居住する市川市内のカメラクラブに入会して、年に数回開かれる撮影会に参加し、都の周辺をはじめ、信州、九州などにも遠征した。

4年前、市の定期健康診断で前立腺がんが発見されたので、稲毛の放射線医療研究所で重粒子線の照射を行い、その後、

市の病院で治療が続いている。一昨年には心臓の心房細動が見つかり、ペースメーカーを埋め込んだ。今年になって下肢動脈の閉塞性歩行障害が起こり、目下、状況観察を続けている。

年を取れば誰でも不具合が起こるのは仕方がないので、無理をしない程度に動いている。

最近ではデジタルカメラを始めたが、何台目かに求めた600万画素の解像力のカメラに長焦点のズームレンズをつなげ、散歩に持ち歩き、面白いと思う状況を取っている。

拙宅の近くには、千葉県が管理する境川が流れている。市の下水対策の遅れで、水質は悪く、ドブ川に近いのが実態だ。川のひとつりに小公園があつて、カンヒザクラが植えられている。これは1月中旬頃から3月初めまで開花する。花が筒状に下向きに開くので、この蜜を吸いに集まる小鳥たち（メジロ、シジュウカラ）は仰向けに枝につかまり、嘴を花卉の中に差し込む。面白いことに数多く飛来するメジロはほとんどが雌雄がひとつがいとなって寄ってくる。

今年には寒暖の変化が例年より激しく、気象庁は桜開花の予想を立てるのに苦労したというが、3月27〜28日頃から境川の両岸に立ち並んでいるソメイヨシノが咲き始めた。ソメイヨシノには気を付けてみると、花アブという昆虫が集まってくる。花アブは体長がせいぜい10mm足らずなので、カメラがぶれないようにしっかりと支え、焦点をぴったり合わせない

といけない。この注意を守れば、好天であれば、シャッター速度は20分の一秒でOKである。成功した画像では、花アブが桜のシベを押し分けて嘴をさし込み、蜜を吸っている状況がはっきりわかる。

昨年秋頃から、身近に集まる小動物を写すという右のような戦術を立てて、セイタカアワダチソウが生い茂る市有地に集まるアオスジアゲハ、ヒヨウモンチョウ、モンシロチョウの接写ができた。

インターネットで調べると、最近では温暖化のためにチョウの分布圏が高緯度帯に北上しているという。

以上のような次第で、身边の雑事をカメラを通して観察していると、環境の変

惜別の春

化学・生命系では、次の教職員の方々が退職及び転出されました。

- 堤敦司助教授 生産技術研究所教授
- 山口猛央助教授 東京工業大学教授
- 山手雅也講師 大分大学助教授
- 伊藤大知助手 東京工業大学助教授
- 築地真也助手 京都大学助手
- 中島正和助手 University of Sydney Research Associate
- 深尾太郎助手 医科歯科大学メカニカル工一
- 船越正機助手 定年退職
- 前之園信也助手 北陸先端大学助教授
- 萱野英子技術専門職員 食品産業技術総合研究所係長

化を認識できるのではないかと思う。いずれにしても、自分のできる範囲で観察していれば、それなりの成果が得られるらしいと考えている。

第155回親和会総会報告

親和会理事・事務局長 溝部 裕司

第155回親和会では、左記の各議題が審議され、理事会案通り承認されました。

1 退任理事の件

- 下川 洋市（昭和35年応用化学科卒）
- 瀬田 重敏（昭和35年応用化学科卒）
- 瓜生 敏之（昭和36年応用化学科卒）
- 御園生 誠（昭和36年応用化学科卒）
- 三浦 勇一（昭和37年応用化学科卒）
- 和田 啓輔（昭和39年合成化学科卒）
- 相馬 和彦（昭和39年燃料工学科卒）

2 選任理事の件

- 加治 久継（昭和39年化学工学科卒） 会長
- 北澤 宏一（昭和43年工業化学） 副会長

修士修了）

平成18年度会計報告

収入の部	平成18年度繰越金	4,779,450
	年会費	4,699,480
	印刷費	25,770
	年会寄附	212
合 計		9,504,912
支出の部	印刷費	510,740
	報通和親大	978,125
	親和会	32,000
	15回親和会	95,370
	学院親和会	93,712
	事務局運営費	1,358,953
合 計		3,068,900
繰越		6,436,012



駒場時代のクラス会が駒場を出て50年の記念誌を作ることに
なり、先日その50年を振り返った原稿を幹事に
送った。手抜きであるが、同じテーマで
書かせて頂く。

私は恥ずかしながら駒場に1年余計にいたのでこの50年は正確ではなく、また先輩からは50年くらいででかい面をするな、とお叱りもあるが、お許し頂きたい。

昭和30年代初めは戦後10年。「もはや戦後ではない」とはいわれたが、まだまだ復興途上だった。それにしても半世紀、思えば遙かに来つものかな、である。

いつの時代でも半世紀経つと世の中変わっているものだろうが、この50年はやはり人類史にも格段のものだったのではないか。勿論、人間の浅知恵、愚かさ、いさかい、悪巧み、といった面では進歩はなく、むしろ退歩しているかもしれない。

世界ではいろいろ悲惨ないさかいもあったが、日本はその前の時代のような戦争がなく平和で本当に幸いだっただけ。但し戦争に金を出したり、戦争を始めるのに賛成したりするようになるのは50年前の想定外だったし、今や戦後生まれの政治家達の言動にこれからどうなる事かとほら

はらするが、日本も世界も、少なくとも平和であってほしいと切望する。

当時はトランジスタの発明もなく、東通工、今のソニーがトランジスタ・ラジオを出したばかり。やがて半導体の時代となり、今はIT革命。パソコンを家庭でも当たり前のように使つてこの文章も書き、インターネットで送っている。

親和会メンバーもそれぞれの持ち場でこれら時代の変化に大きく寄与されたことと思う。私もプラスチックや繊維原料のプラント建設や製造、開発に従事し、いくばくかの寄与をしたかと思うが、一方で地球温暖化問題などは思いもよらぬことであった。勿論、設計や製造の立場では省エネルギーに常に努力してきたのだったが。その契機は大学卒業後企業に入って最初の仕事、天然ガスからメタノールの製造であった。当時は本など、合成ガス製造といえまだ石炭ガス化の

記述ばかりだったが、国井大蔵先生の「炉と燃焼装置」という本で「ガス化装置の効率に投入した石炭の発熱量に対するCO₂の発熱量で表わされる」とあり、なる程と感銘を受けた。エネルギー保存の法則から当然だが、とかく物質だけに目を奪われがちな自分を反省した。

石炭を天然ガスに置き換え、合成装置まで含めればメタノール製造のエネルギー効率になり、本質的にエネルギーが原料であることを示唆している。現在、メタノールやアンモニアのプロセスの性能は製品トントン消費天然ガスのギガ・ジュールで表現されている。暴論のそしりはあるが、アンモニア製造での窒素、メタノール製造でそれに相当する二酸化炭素

は、本質ではない。各種炭化水素や他の有機化合物もエネルギーで作るし、鉄やアルミニウムもエネルギーで作っている。物質に価値を与えるのはエネルギーであり、物質はエネルギーの化身、化学工業も発電同様エネルギー変換である。エネルギー変換の革新として燃料電池には大いに期待するが、水素エネルギー論議には、時として電気と対置すべきエネルギー

新会長・副会長のご挨拶は、次号に掲載致します。

加治久継新会長



北澤宏一新副会長



編集後記

学生時代に受けた授業でいつまでもしっかりと記憶に残っているものがあります。そしてそれらは、内容そのものというよりは、教えることに対する先生の思い入れであり、その先生の、私がイメージしていた「大学の先生らしさ」であったように思います。ですから、それまでの高校での授業との不連続性、ギャップの大きさという点で、駒場時代の授業に印象深いものが多いのですが、専門に進んでからも5号館の多くの先生方から強烈な薫陶を受けました。そしてそうした授業を受けた頃が大変懐かしく思い出される

としての本質が忘れられていないだろうか。

地球温暖化問題への対処に最近はいよいよ燃料が真剣に議論される。大いに結構だが、すべからず目配りされた大局的なエネルギー収支を見定めていかねばならない。

大分脱線したが、年寄りの妄言とお許し頂きたい。

事務局のご案内

〒113-8656
東京都文京区本郷7-3-1
東京大学工学部5号館内
TEL/FAX: 03-5841-7400
E-Mail: shinna@chem.tu-tokyo.ac.jp

事務担当者 近藤 檀(月~土)

ようになりまして。

今年の親和会懇親会は10月20日に開催予定ですが、現役、そして退官された先生方には、是非ともお顔をみせていただきたく存じます。そして卒業生の方々とって、自身の指導教官ばかりでなく、その他の先生方とも学生時代の思い出、授業の思い出などを語り合う場になってくれればと願っています。

この3月をもって、三浦会長、御園生副会長をはじめ、現在の親和会を立ち上げ軌道に乗せるために多大なご貢献をいただいた理事の方々がご退任になりました。永年のご尽力にあらためて御礼を申し上げます。

(記/溝部裕司)